

# 六甲山系の岩石にまつわる民話と伝承 (続)

イワクラ学会理事 江頭 務

六甲山系は阪神間の市街地の背後、西は塩屋から東は宝塚まで、幅約10km、長さ約30kmにわたって連なる細長い山系である。最高峰は931mで1000mに満たないが、市街地に近いことから市民の憩いの場となっている。本稿は、先にイワクラ(磐座)学会誌7号に掲載した「六甲山系の岩石にまつわる民話と伝承」の続編である。

## ① 清盛の涼み岩

シュラインロードを下りきった北側に古寺山と言ういかにも何かありそうな山がある。昔ここに法道仙人の開いた多聞寺という寺があり、平清盛が福原に都を移したときに都の鬼門(北東)を護る寺として大切にした。その後、源平合戦で源義経が一の谷を攻める時に、その道案内を断った

ために焼き払われたそうである。頂上には、「清盛の涼み岩」と呼ばれる大きな岩がある。この岩はまた、修行岩とも呼ばれている。

## 〈伝承〉

### その1

『神戸の伝説』田辺真人著  
神戸新聞総合出版センター  
1998年刊 p183より

平清盛がこの岩の上で涼んだといわれる。また、古寺山の僧がこの岩の上で修行したとも伝えられる。古寺山には膨大な宝物が埋められていて、村が衰えたら掘り起



清盛の涼み岩(修行岩)の上部

こせとの言い伝えがある。里謡にも『三尺三寸雪降れば 古寺山は消えている 三つ葉おとぎ(ウツギ)の木のもとに 九億九万の金がある』と歌われている。

## その2

『武庫川・六甲山附近口碑伝説集』

辰井隆著 民俗研究所

1941年刊 p32より

山の上に硯石―涼み石といふ硯石のような石があつて(蓋は大阪へ行っているといふ)、

この硯石で墨をすってハンコ押したら、二十枚一ペンとほりよつたといはれてゐる。

(原文のママ転載)

## ② 紋左衛門岩

古地図を見ていると、甲山の西北にある檜ヶ峰の麓を通るドライブウエー沿い、仁川上流に紋左衛門岩と呼ばれるおもしろい名前のついた岩があつた。さっそく行つ

てみると、それはすぐに判明した。崩落防止用の金網に覆われ見る影もないが、昔はかなり立派な岩であつたことが偲ばれる。この岩には、紋左衛門が天狗に化けて水争いの村人を諭したとされる民話が残されている。

江戸時代の初め、大社(たいしや)村は、大日照りに襲われた。井戸堀りしても水は出ず、雨ごいとしても雨は降らず、村人たちはどうしてよいのか分からなくな

つた。その時、中村の紋左衛門が、「わが社家郷山(しゃげこうやま)に降つた雨が仁川(にがわ)に流れこんでいる。社家郷山の水は大社村の水だ。仁川の上で水を引こう。」と、村人たちに訴えた。

話は一気にまとまり、工事は止まった。ところが、取水口の近くは岩や崖で、トンネルを五十メートルも掘らないと水が通らなかつた。村人たちはこの岩山にそつて、竹をくりぬいた仮樋(かりどゆ)をつけて村に水を送るかたわ

ら、この岩山に穴をあける難工事に取り組んだ。

ところが、仁川の川下の村々では、「仁川の水を大社村がとっているぞ。」「くわを持って一本松にあつまれ。」と、大きわぎになった。夜になり、一本松に集まった青年たちは、くわやすきを持って、取水口にやってきて、大社村への水の流れを止めた。

大社村では、すぐに修理をして水を引いたが、川下からは、毎日のように工事の妨害をしてきた。大社村の人々は、いきりたつた。

これを見た紋左衛門は、「みんなの言うとおりだが、今は争つてはいけない。わしによい考えがある。ここはわしにまかせてくれ。」と、大社村の青年たちをなだめた。今日もあたりが暗くなると、いつものように川下の青年たちがやって来て水路をめちやめちやに壊した。その時、「ギャー。」と大声を上げたかと思うと、川下の青年たちは



金網に覆われた紋左衛門岩

〈民話〉

西宮ふるさと民話『41 六甲山の天狗』

<http://www.nishi.or.jp/~siryo/minwa/>より

その場にすわりこんでしまった。見ると大岩の上に、まっ白い着物をきてうちわを手にした赤黒い顔の大天狗が、青白い月の光をうけて立っていた。大天狗は大きな目玉を光らせながら、「わしは六甲の天狗じゃ。この山から流れ出る水は皆のものじゃ。この水は仲良く使え。」と、山すその村々にまで聞こえるような大声で叫んだ。川下の青年たちは、おそろしさのあまり、われ先にと逃げ帰っていった。

このことがあってから川下の村では、「六甲の神さまにもらう仁川の水じゃ。神さまのお告げにしたがわねばなるまい。」とささやくようになり、大社村の水路工事の邪魔をする者もなくなった。実は、大天狗になって岩の上に現れたのは中村の紋左衛門であった。そして、その岩は、いつしか紋左衛門岩と呼ばれるようになった。

〈注〉

① 紋左衛門岩は、甲山高校の近くにある盤滝口の交差点から仁川の上流（西）へ 200〜300m行ったところにある。

参照地図『六甲山登路図』 木藤精一郎著『六甲・北摂ハイカーの径』付録 1937年刊

② 参照サイト：

西宮の新田開発と用水の歴史  
<http://ks.dousou.sakura.ne.jp/nisinden/nisisinden.htm>  
 兜籠底績碑（とろくていせきひ）  
[http://info.leaf.or.jp/index.cgi?information,history\\_culture,item,](http://info.leaf.or.jp/index.cgi?information,history_culture,item,)

6

### ③ 袂石（礫石）

この岩は有馬温泉の太閤橋の脇にある。袂石は「たもといし」、礫石は「つぶていし」と読む。高さ約5m、周囲約19m、重さ約130トンの巨石で、古代の巨岩信



仰の遺跡ではないかといわれている。

注連縄のかけられた袂石（礫石）

に乗り、重藤の弓（注）と白羽の矢を持つて鷹狩をしていました。松永城主はあやしく思つて熊野久須美命を射ようとした。熊野久須美命は袂から松永城主に向かって小石を投げられました。この小石が年月を経て大きくなり、袂から投げられたので袂石とか礫石といわれるようになりました。その後、有馬では葦毛の馬や重藤の弓、白羽の矢を持つて入ることが禁じられ、もし持つて入れば晴天が急に曇り風雨がはげしくなると伝えられています。

（注）重藤（しげどう）の弓 下地を黒塗りにして、その上を藤で巻いたもので、大将などが持つ弓。

〈民話〉有馬温泉観光協会の説明板より

あるとき熊野久須美命（湯泉神社の祭神）が狩場を通られたときに、松永たんぼぼ城主が葦毛の馬

### ④ 高座岩（こうざいわ）

生瀬・武庫川上流（武庫川溪谷）



上面が真平らな高座岩

の川中に雨乞いで有名な高座岩と呼ばれる巨大な岩がある。この岩の上で、雨乞いのための馬の生贄祭祀が行われたらしく、岩の上面は広く平坦である。

〈民話〉西宮ふるさと民話

『38 高座岩と白馬』

<http://www.nishi.or.jp/~>

siryo/minwa/より

高座岩の下には龍宮城まで行ける道がついていて、乙姫様が高座岩の上に出てきて遊ぶことがあった。乙姫様は岩をよごされるのをたいへんきらい、岩が少しでもよごれると、天の神様にたのんで雨を降らせてもらい、せつせと掃除をした。そういうわけで、雨が降り出すと、また、乙姫様が高座岩を洗っていなさる。」と、村人達は話していた。

ある年のこと、来る日も来る日もかんかん照りで、田の水が干上がり始めた。そこで、村人全員で氏神さまに雨乞いをしたが、雨はいっこうに降らなかつた。その時、村の老人が言った。「昔から、天の神様は白馬がお好きと聞いた。白馬を生贄として高座岩の上にお供えしてはどうじゃろう。それに、乙姫様も岩の上がよごされたら、天の神様に、雨を降らせてくれるようにたのんでくれるかもしれない。」

やがて、毛並みの美しい白馬が引かれてきた。「この白馬を殺すのか。」「かわいそうじゃのう。」「村じゃ今、水がなければ、みんなが飢え死にするのじゃ。」村人たちは、口々に言いながら、白馬を東山の猪切谷（いのきりだに）へ連れて行き、首を切り落とした。首は生木の棒に藤づるでつるされ、ふたりの若い衆にかつがれた村人の行列は、高座岩までやってきた。

岩のまん中につくられた祭壇に白馬の首が供えられた。祭壇から落ちる真赤な血は、みるみるうちに高座岩を血の色でぬりつぶしていった。「天の神様、白馬の首をお供えします。どうか、一日も早く雨を降らせてください。」村人達が一心に祈ると、今まで一点の雲もなかつた空に、六甲山の向こうから真黒な雨雲が現れ雨が降り始めた。

⑤ 行基の投げ石行基は(668〜749年)は奈良時代の僧で畿内を中心に諸国を巡り、民衆教化や池、堤、橋の建設などの社会事業を行ない、後に行基菩薩と称された。伊丹・有馬は行基との縁が深く、多くの伝説が残されている。この石は、阪急電鉄中山駅と山本駅の間、天満神社の東の稲荷大明神の祠のそばにある。



行基の投げ石

(<http://www.murakuchaihana.com/yamamoto.html> より)

〈伝承〉

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/kr-s>

[uzuki/96garuko-0403.htm](http://uzuki/96garuko-0403.htm) より

その1

行基が街道にあった邪魔な岩を杖で投げ飛ばしたもので

その2

天狗が六甲山から投げたものとの言い伝えがあるが、付近にあった古墳の天井石の一つとも考えられる。

⑥ 矢文石

久々知須佐男神社は、阪急電鉄塚口駅の東にあたる尼崎市久々知の近松公園の隣にある。

近松公園は江戸時代の文豪・近松門左衛門を記念したもので、近松の墓所がある廣濟寺もそばにある。



須佐男神社の矢文石（正面）



矢文石（背面）

〈民話〉

久々知須佐男神社の説明板より

多田満仲公は摂津国守に赴任した時、住吉大神の御信託によって当須佐男神社のこの石の上から矢を放った所、矢は雲の上遙かに飛び上がり、池田五月山から戊亥（西北）の方向にあたる谷蔭の深いところに光を放って落ちていった。満仲はその放った矢を問いながら来られた処、頭が九つもある大蛇に突き刺っており、大蛇から流れた血水跡はまるで紅の河のようになって流れた。早速大蛇の首を切り、九頭の明神とあがめ祀った。大蛇の血水の引いた所が多く、田のようになっていたので、所の名を多田と名付けた。また矢を問いながら来た所から、矢間という地名もつけられた。

⑦ 福石



福石 岩は割れており鉄のベルトを巻いて保護している。

阪急六甲駅の北、篠原北町の篠原厳島神社の境内にある。篠原厳島神社は篠原地域の氏神で、2月の節分に針供養祭が行われるほか、5月の春祭りでは猿田彦神

役を先頭に子供神輿・稚児行列が、篠原の氏子区域を巡行する。

〈伝承〉

その1

篠原厳島神社の説明板より

平清盛が安徳天皇を奉じて神戸の福原に都を遷した頃、毎夜のように東北の方に怪光を発する岩がある夢を見た。清盛は不審を懐き、家臣越中次郎兵衛盛純を遣わし探させたところ、この岩が見つかったといわれる。清盛は、この靈地に尊崇する市杵島姫命を祀り、この石を福石と称した。

その2

<http://www.city.kobe.jp/cityoffice/82/100sen/nada100/contents/05/frame.htm>より

神社の縁起となっている「福石」は、平清盛が平盛継に命じて討ち取った、頭に珠を担ぐ大蛇の首を埋めた上に置いた大きな石といわれている。

### ⑧ 蛙岩（鴨越墓園）

神戸電鉄鴨越駅の北東、鴨越墓園新芝地区西方（道路の西側に道がある）にある。

このあたりは、源平合戦一ノ谷の戦の「鴨越の坂落し」で有名な場所である。



蛙岩の奇勝

### 〈伝承〉

[http://www.14.plala.or.jp/niu\\_yamada/simotani.htm](http://www.14.plala.or.jp/niu_yamada/simotani.htm) より

蛙岩は、複雑な形に風化した大岩盤が数匹の大蛙と多くの子蛙に見える奇勝で、夜になると巨大な蛙が旅人を襲ったとも、毎日1匹の蛙が生まれ出たとも言われている。写真の左側の平家陣地方面を見ている蛙の頭のような岩が一番代表的な蛙岩である。山道の途中にあり、義経の騎馬隊にとっては進軍しにくい場所だったのでないかと思われる。

### ⑨ 長田の夜泣き石

長田神社は、神功皇后が新羅より帰還の途中、武庫の水門に於て「吾（あ）を御心（みこころ）長田の国に祠（まつ）れ」とのお告げを受けて、山背根子の女・長媛（ながひめ）を奉仕者として創祀された全国有数の大社である。延喜式の制では名神大社、祈雨八十五座に列し、神戸（かんべ）41戸もつて奉祀護持され、今日の神戸発展の守護



長田の夜泣き石

神と仰がれている。神戸の地名はこの神戸（かんべ）に由来する。

〈民話〉

長田神社「ながたの民話」

<http://www.1.newweb.ne.jp/wb/jinja/html/yonakiishi.htm> より

注

夜泣き石は社務所の庭にあるらしく非公開とのことである。

長田から苅藻川をさかのぼって明泉寺の谷を北に進み、白川に通じる長坂越えと呼ばれる山道があった。この長坂の道端に円錐形の富士山のような姿をした石があった。「この石を、長田神社の庭石にしよう。」と長田の村人は、苦心してその石を運びおろし、神社に納めた。

贈られた長田神社の当時の神主は、

「神社にはたくさん庭石があるから、この見事な石はわが家にもらって帰ることにしよう。」と、平野の自宅に持ち帰った。

その夜のことであった。夜も更けた頃、神主の家では、どこからともなく、すすり泣くような声があったのである。「庭で誰かが泣いているような声があるが……」。「シクシク、長田へ帰りたい。シクシク、長田へ……。」庭を見ても、誰もいない。いく夜もそんなことが続いた。ついに神主は夜通し庭で見張りをすることにした。

そしてその夜も、泣き声が聞こえた。「シクシク。シクシク、長田へ帰ろう……。どこから聞こえてくるのか調べてみると、庭に置いた富士山の形の石から聞こえてくるようであった。見ると、石の表面がじつとりとぬれていた。翌朝、さっそく神主は村人に頼んで石を長田へ運んだ。これを夜泣

き石と呼んで、神社の境内に安置した。

#### ⑩ 和田の三石（みついし）

三石神社は、和田泊として知られる神戸市兵庫区の和田岬にある。この地域は、全国有数の重工業地帯として知られる。



三石之遺跡の碑



後に鎮座する三石

### 〈伝承〉

「神戸の伝説」 田辺  
眞人著 神戸新聞総  
合出版センター 1  
998年刊

『和田の三石』 p157より要約  
その1

和田岬の田んぼの中に、三つの石が転がっていた。三韓に出兵の際、神功皇后は懐妊していたので、出産を遅らせるためこの三つの石



を腰の周りに挟んで腹を冷やした。戦いの後、九州に立ち寄りこの石をとり、安産を祈ったところ皇子（後の応神天皇）が生まれた。神功皇后は、さらに和田岬に立ち寄り、この三つの石を置いて帰った。後に、三石神社ができて、妊婦は神社の境内にある小石を三つ拾って帰り、安産のお守りとした。

## その2

三石は、神功皇后が広田神社・生田神社・長田神社の神々を初めに祭ったところとも言われている。

## その3

推古天皇が服従しない辺境の民の鎮圧を願って和田の浦まで来て禊をした時、天皇が座った石が三石なので、三石神社のことを祓殿塚（はらいどのづか）とも呼んだ。

## その4

「三石神社」の由来

<http://www.mitsuishi.or.jp/main/history.html>より

天平年間（730年頃）僧行基が務古の水門なる和田泊を興した時、神功皇后の神霊が現れ船の往来を守るといわれたので、祓殿の旧跡に祠を立て大輪田泊の鎮護とし、神号を往来神・雪気神（ゆきけのかみ）とした。（『西撰大観』）後の文禄2年（1593年）、雪気神を三石大神と改称した。

### 〈注〉

信憑性はともかく、三石神社の立て札によると、神功皇后が和田岬に立ち寄ったのは西暦200年とされる。また、推古天皇の三石での禊は西暦602年とある。さらに三石は、広田神社・生田神社・長田神社に加えて住吉神社（大阪の住吉神社でなく、神戸の本住吉神社と思われる）の神々を初めに祭ったとある。



雄高座（おこうざ）



雄高座から、赤い屋根の「幸せの村」と高尾山の電波塔を望む

## ⑩ 白川の夫婦岩（高座岩）

「高座」と名がつく地名は各地にある。六甲山系だけでも、武庫川渓谷の高座岩・名塩の高座山・芦屋の高座の滝がある。

「高座」の名前の意味するところは、これから紹介する白川の高座岩の伝承から明らかであろう。即ち「高座」とは、神の座する岩のことであり、磐座そのものを意味する。そのせいか、岩は座りやす

いようにまな板のように平坦だ。

西神電鉄「名谷駅」からバスで東白川台に降りた北東の方向に高座山（たかみくらやま）と呼ばれる山がある。その山の頂上に、高座（こうざ）の岩という上が平らになった大きな岩が二つあり、夫婦岩ともいわれている。東にあるのが雄高座（おこうざ）で、広さは畳六十畳敷ぐらい、西にあるので雌高座（めこうざ）で畳四十

曇敷ぐらいある。



雌高座（めこうざ）、樹木に包まれ展望はまったくない。



雌高座の岩のうえから湧き出る「壽命水」かなり汚く、靈水とは認めがたい。

### 〈伝承〉

「神戸の伝説」 田辺真人著  
神戸新聞総合出版センター

1998年刊

『高座岩の壽命水』 p211から

要約

古事記にでてくるイザナギノミコト・イザナミノミコトが国作りのあと、それぞれ雄高座・雌高座の岩の上で休んだと言われる。

景色がよいところで、神功皇后、安徳天皇、建礼門院もこの土地にきたと伝えられている。

雌高座の岩の上に縦30cm、横10cmほどの窪みがあり、水が湧き出ている。この水は「壽命水」といわれ、子供のない夫婦がこの岩の上に十七日間お参りし、一生懸命に北斗七星に祈ると立派な子供に恵まれると伝えられる。また、薬水として疱瘡（天然痘）にかかっている人がそこを洗うと、跡も残さずきれいに治るといわれている。

### 〈注〉

引用文献「神戸の伝説」では、壽命水は「雄岩」にあるとあるが、「雌岩」の誤りである。また、『北斗七星に祈る・・・』というのは、北辰信仰であろう。

（終）